

県中教研 国語部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 作道 正也
題 字 金山 泰仁 先生

古典で何を学ぶのか

指導主事 海見 純

10月に開催された中学校教育課程研究大会で、1年生の古典『竹取物語』の授業を参観した。くらもちの皇子の「まことしやかなうそ」を読み取るという授業だった。

授業の導入は生徒が自分の生活体験に根ざした「うそを信じ込ませるポイント」を発表するという活動であった。この部分が実に印象深かった。

生徒曰く、「例を挙げる」「具体的に話す」「真顔で話す」「場所をごまかす」「関連することを付け加える」。おそらくは友達や先生、保護者を見事に信じ込ませてきた生徒たちの「まことしやかなうそ」を、生徒たちと一緒に笑いながら聞きつつ、課題意識を向上させるいい導入だと思った。

生徒たちの「まことしやかなうそ」のつき方は、くらもちの皇子のうそのつき方そのものであり、作品の内容に関わる生徒たちの実体験を生徒同士で共有することで、この日の課題であるくらもちの皇子の「まことしやかなうそ」を読み取る視点を共有することにつながっていた。

さらに、何より、この導入は、生徒たちの生活体験とくらもちの皇子の「まことしやかなうそ」が、千年の時を隔てても多くの共通点をもっていることを自然な形で生徒たちに感じさせる言語活動になっていた。「古典の文章に出会い、現代とのつながりを考える」という単元の副題を、これ以上ない形で具現化した授業であった。

さて、新学習指導要領では古典の音読に重きを置くことが力説されている。

確かに、従前の文章の詳細な解釈に偏った授業は改められるべきである。しかし、古典が古典たる理由は、その普遍的な人間の在り方に関する理解、あるいは内容の面白さにある。生徒たちは小学校で古典の音読に親しんできている。中学校では、音読に加えて、古典の内容の面白さを生徒が感じられる授業を目指したい。(東部教育事務所)

言葉への自覚を高める

部長 作道 正也

「なぜ国語の勉強をするのか」時々生徒から聞かれる言葉です。国語は母語として無意識のうち身に付け、日常的に用いている言語であるため、日常のコミュニケーションに不便さを感じていない生徒にとって、学習する意義が見えにくい教科なのかもしれません。

昨年告示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善を推進することが示され、その鍵として「見方・考え方を働かせる」ことが挙げられました。国語科の目標にも「言葉による見方・考え方を働かせ」という表現が加わりました。

さて、「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、どのようなことなのでしょう。指導要領解説によれば、「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」とあります。

つまり、普段、生徒が意識せずに使っている言葉の意味や働き、使い方等を国語の授業で意識させることです。これはこれまで国語部会の多くの実践の中で取り組まれてきたことです。

今後も、付けたい力に結び付く言語活動の工夫、言葉についての思考・判断・表現を促す学習課題の吟味等に取り組みながら、生徒が授業の中で、言葉についての新たな発見をし、「なるほど」「そうだったのか」と目からうろこが落ちるような経験や、「わかった」「できた」と実感できるような経験を積み重ねられるような授業を展開していくことが大切だと考えます。そうした授業を通して生徒が国語を学ぶ意義を感じることで、言葉の価値を認識し、国語を尊重する態度や国語の能力を向上させようとする態度を育てることにつなげていきたいものです。

(富・山田中)

第61回 研究

新川地区

(黒・桜井中)

(1) 研究授業

青谷花代教諭が単元名「いにしへの心に触れる」から「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」の授業を1年生で行った。本時のねらいは、竹取物語の特に空想的な部分で教科書には古文の記載のない「かぐや姫の昇天」の場面を古文と現代文の両方で読ませ、竹取物語の魅力をさらに味わわせるというものであった。生徒にとっては初めて目にする文章ということもあり、古語の意味を確認した後、音読練習を行った。その後、古文を読んで、気付いたこと、考えたこと、感じたことを書き、自分が書いたことを班で発表し、話し合いを行った。さらに、班での気づきや話し合った内容を全体で発表し合った。段階的に読み深めることで、竹取物語の「魅力」に迫ることができた。授業者の青谷教諭は終始笑顔で、明るい雰囲気ですべての授業が進められ、活発な話し合い活動が行われた。



(2) 研究協議

協議会では、特に「魅力を味わう」ための発問について話し合われた。どこが、何が魅力なのか、そしてその根拠は何か、どうしてそう思ったのかを求めるような発問もあるなどの意見が出された。また、評価の難しさについても意見が出され、参観者にとって非常に有意義な授業であった。

(3) 研究発表(指導助言)

松田明大教諭が「赤光～死にたまふ母～」 「読書生活を豊かに」という2つの単元における実践について研究発表を行った。「付けたい力」の育成に効果的な教材の開発、学習課題や学習活動の工夫、生徒の思考活動の深化・拡充に着目した指導の工夫を行うことで、生徒の言語能力を育成することを目指した実践であった。上田和則指導主事(東部教育事務所)からは、教材開発の中で教える知識を見極めること、教材研究で興味・関心を高める工夫をすること、読み深めるための段階的な指導計画を立てること等について具体的な指導をいただいた。

相山 浩衛(滑・滑川中)

富山地区

(富・西部中)

(1) 研究授業

富山西部中学校では、2つの部会に分かれて授業研究を行った。井上孝子教諭による「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」(1学年)の授業では、「くらもちの皇子」の「まことしやかなうそ」について、グループで多角的に捉えて読む授業が展開された。4人班で意見を交流させながら、くらもちの皇子の狡猾さと古典の面白さに気付くことができた。



また、豊田友子教諭による

「仁和寺にある法師—『徒然草』から」(2学年)は、古典を読み深めるだけではなく、「自分ならどうするか」と、主体的に考える場面のある授業であった。勘違いをした高僧のプライドを傷つけないように間違いを訂正するときには、どのような表現をすればよいかを考え、みんなで検討する過程で、クラス全員が参加しているという一体感が感じられた。

(2) 研究発表

高田祐典教諭(三成中)から、「付けたい力に結び付く言語活動の実践」についての実践例の紹介があった。「書くこと」の領域では、2年生が書いた短歌を3年生が読み、鑑賞文とアドバイスを付けて返却するという試みが紹介された。学年をまたいでの学び合いの可能性が示唆され、今後の各校での取組の参考になった。

(3) 研究協議(指導助言)

岡村紀子指導主事、海見純指導主事(東部教育事務所)から、付けたい力に結び付く言語活動になるための観点について指導助言があった。小学校で読んだ古典を、中学校ではどのように深めるかについての工夫について教えていただいた。

(4) 授業力向上のための講義

富山大学の米田猛教授をアドバイザーに迎え、「古典に親しませる」ための活動について講義を受けた。古典学習における言語活動の在り方や、言葉への思考力を高める授業の展開について指導をいただいた。

加藤 大敦(富・水橋中)

大会を終えて

高岡地区

(射・小杉中)

(1) 研究授業

八下田健輔教諭による「随筆を書くころ～『字のない葉書』～」の2年生の授業では、随筆「字のない葉書」の学習を生かし、



「書く」学習への移行を図り、自分の思いの詰まったものをテーマに、題材を考え、イメージを広げる活動を行った。冒頭で、教師が過去の作品や教師自身の文例を示してゴールの姿をイメージさせた。その後、生徒たちは、個人で思考したアイデアを交流し合い、グループでのインタビューやアドバイスを通して、紹介するものの説明やエピソードについて書く内容を明確にしていった。

(2) 研究協議(指導助言)

授業後の研究協議では、ゴールの姿をイメージさせる教材提示の工夫、グループ活動の進め方やインタビューする際の質問の在り方等について、意見交換がなされた。

指導助言者の高岡陽子指導主事(西部教育事務所)からは、具体的な生徒の姿を想定した評価規準の作成と振り返りの大切さ、新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びについて本時の授業を基に助言をいただいた。

(3) 授業力向上のための講義

富山県総合教育センター学力向上推進チームの福原達指導主事による「全国学力・学習状況調査を生かした学習指導の改善・充実」の講義が行われた。これからの時代に求められる学力を踏まえ、今年度の調査結果を基に富山県の実態を分析し、授業改善のポイントとして、①根拠を示し、理由を説明しながら、自分の考えを述べること、②語彙指導の充実・改善が示された。

早瀬 勝(氷・北部中)

砺波地区

(砺・出町中)

(1) 研究授業

埜村真由美教諭が、「絵画の魅力がより伝わる鑑賞文の書き方」について研究授業を行った。これまで書き上げてきた鑑賞文をグループで交流し、友達の作品やアドバイスから自分の鑑賞の観点や根拠を見直すという授業であった。

単元の導入時に美術科と連携し、絵画を鑑賞する観点を学習したり、鑑賞文の題材となる二



枚の絵を実物大で用意したりと、生徒の学習意欲を喚起する手立てが入念になされていた。生徒は詳細に絵を鑑賞しながら、自分が捉えた絵画の魅力や鑑賞文で積極的に表現していた。また、友達の作品にも興味を示し、改善点を積極的にアドバイスし合う姿が見られた。

(2) 研究発表

小矢部市、南砺市から松本真弓教諭(石動中)と今井敦史教諭(福野中)の研究授業の報告があり、意見交換を行った。松本教諭の「類義語・対義語・多義語」の授業では、類義語の特徴に気付かせるため、ベン図を用いて共通点、相違点を分かりやすく表したり、話し合いモデルを提示して、何についてどのように話し合いを進めればよいのか確認したりするなど、全体の場合でも、互いの意見を関わらせながら考えを深める工夫がなされていた。

(3) 指導助言

指導助言者の梶尚美主任指導主事(西部教育事務所)からは、教師の指示、説明を減らし、生徒が主体的に取り組むための指導の工夫に努めることや、振り返りの時間を確保し、学びの実感をもたせることが重要であること等の助言をいただいた。

下村 知絵(南・吉江中)

魚津市中教研

「主題を的確に捉えるには」

今年度は、「読むこと」の学習を中心に研究を進め、6月には「内容や主題を的確に捉える能力を身に付けさせる」授業を行った。物語「光る地平線」から「作者が伝えたかったこと」「印象に残った言葉」を読み取り、読書カードを作成した後、班内で紹介し合った。

授業後は、授業を参観して気が付いたことや課題点を基に協議会を行った。その中で、「効果的なこと」と「改善すべきこと」の2つについて話し合い、主題解明に向けた協議を行った。

今回の授業実践から、根拠を明らかにして発表し合ったことで、より叙述に着目して読解することができた。また、「読書カード」を作る活動を行うことで、普段は意識しない表現や比喩に着目し、文章を深く読解することができた。

仙名 駿佑（魚・西部中）



富山市中教研

「大岡信さんに学ぶ」

8月、県歌人連盟顧問久泉迪雄氏に、「人麻呂の灰～大岡信さんのこと」と題し、講演をしていただいた。久泉氏と、詩人であり教科書教材文の著者でもある大岡信氏は、ともに県立近代美術館設立に携わり、公私にわたり交流を深めた。大岡氏が富山駅北の「環水公園」の命名者であることはあまり知られていないが、生涯を通じて富山県と深く関わり、何度も富山を訪れている。久泉氏は、「大岡信は気さくで相手を大事にする温かい方だった」という。今回の講演では、富山との関わりに加え、その温かな人柄に多くの人が魅了されたことを紹介していただいた。

大岡氏は、講演のために県内の高校を訪れた際、学生を前に「国際人になるためには、日本や富山を知らなければならない。日本や富山を語れるようになりなさい。」と語ったという。「身近なものを知る」ことは、簡単なようで難しい。大岡信さんのものの見方や考え方を学んだ有意義な講演会であった。

加藤 大敦（富・水橋中）

高岡市中教研

「表現に即して読み取ること」

志貴野中学校の吉田茜教諭が「表現に即して根拠を明確にし、読みを深めさせる」という学習課題で授業を行い、①「生徒が主体的に学習に取り組むための課題設定の工夫」②「生徒が自分の読みとの共通点や相違点に気付き、考えを深めるための意見交流の工夫」の2点に留意し、指導を進めた。

①については、「学習課題を提示したら、『何について考え』『どのようにすることを通して』『何が分かればよいか、できればよいか』について、生徒自身に認識させることが重要であること」②については、「『どうすれば自分の考えをもつことができるか』『どうすれば、考えを声に出して話し合い、交流できるか』を意識した手立てを用意することが重要であること」等が解明された。

話し合いや自分の考えを発表させるという形態の授業では、自他の答えを生徒自身が評価して適切に選択できる力の育成も大切であることを再認識させてくれた。

山森 義人（高・戸出中）

砺波地区中教研（南砺市）

「文章の構成から筆者の意図を探る」

福野中学校の今井敦史教諭が「筆者の説明の秘密を探ろう」という学習課題で、図について説明する文章における構成の工夫をとらえる授業を行った。筆者と同じ構成の文例と、段落の構成が異なる文例の二つを比較しながら、筆者の意図を話し合った。



終末には、評価規準に合わせて、A「新たな図を用いて短い説明文を書く」B「筆者の論の展開に合うように文章を並べ替える」という評価問題が二種類用意されていた。Bの基準を全員が達成できるように授業が構成されており、1時間の授業のねらいを明確にし、学びの達成感を味わわせたいという指導者の熱意が伝わる授業だった。

下村 知絵（南・吉江中）